JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	オープンイノベーション加速へのグローバル人材育成
Author(s)	株式会社GVIN代表取締役CEO & シーエスアール(株)会長
Citation	年次学術大会講演要旨集，23: 113-118
Issue Date	2008-10-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/7515
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

１Ｃ０５

オープンイノベーション加速へのグローバル人材育成

株式会社 GVIN 代表取締役 CEO
＆　シーエスアール（株）会長

はじめに

企業活動のグローバル化は、必然的にグローバルなオープンイノベーションの重要性を増している。グローバルな顧客のニーズに正確に応える商品の開発を迅速に行うためには、いかに精鋭部隊といえども、ドメスティックな、さらには企業内部だけのチームだけでの対応では限界があり困難である。やはり、グローバルなスケールで、企業外部の英知の活用が大事である。しかも、このことは、グローバル化が進むにつれて、企業の競合力に影響を与えてきている。

オープンイノベーション

本論分では、企業が、自社の有する研究開発部門からの新技術提案により、新商品を生み出すことを「クローズド・イノベーション」と定義する。これに対して、企業が外部から新技術の種を取り入れて、これを育て、新商品を生み出すことを「オープン・イノベーション」と呼ぶ。したがって、「オープンイノベーション」は、グローバルな規模での技術創造に関する協力（コラボレーション）である。

オープンイノベーションのタイプ

「オープンイノベーション」は、下記の３タイプに種別できるであろう。

（１）　大企業対グローバル・ベンチャー

これは、大企業がグローバルなスケールで世界のベンチャーの技術を取り入れる、最もスタンダードなタイプである。そのコンセプトは、下記の図の通りである。

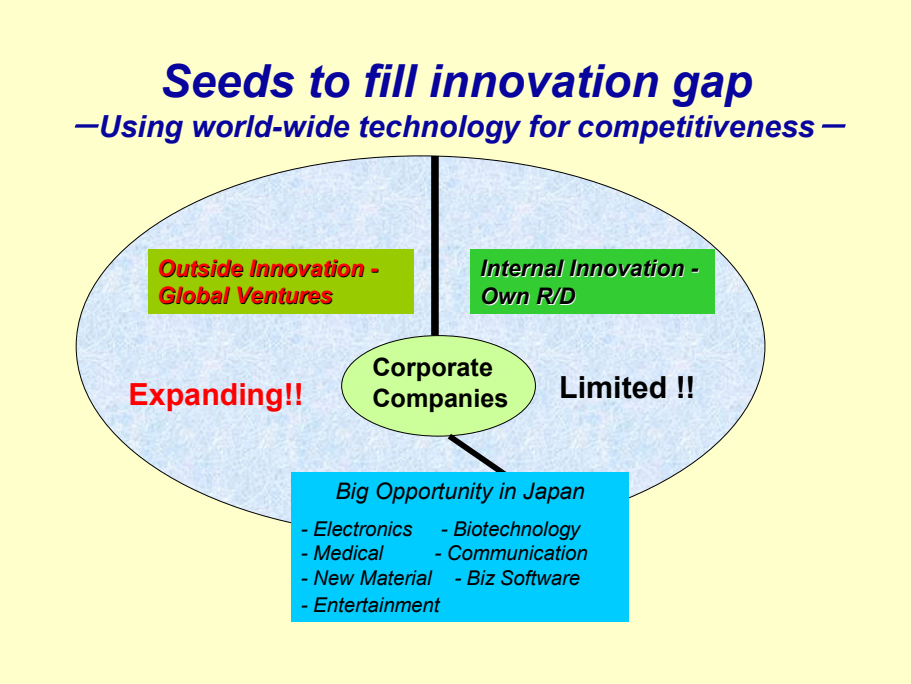

図１　大企業対ベンチャーの「オープンイノベーション」の概念

（２）　ベンチャー対ベンチャー

これは、特に、成功したベンチャー企業が、更なる発展を遂げるために、自社のコアにない技術を持つベンチャーを取得あるいはそのベンチャーを買収することによって、顧客対応の総合力を強化する場合などに、よく見られる。例えば、近距離無線チップの開発で成功したベンチャー企業が、自動車のハンズフリー対応のソリューションを提供するために、音声処理に優れたソフトベンチャーの技術を買収等により活用するなど、具体例が多々ある。

下図はそのような一例である。

図２　無線チップメーカーが音声処理ソフトのベンチャーの技術を活用

（３）　オープンなグローバル産学連携

グローバルな産学連携では、大学の有する優れた基礎技術や理論と、企業の有するデバイス開発力や精密測定技術等とを相乗効果的に連携（シナジー連携）させることにより、企業だけで創出できない新概念や新技術創出が期待できる。下記の図は、そのような一例「相補的な国際産学連携」の一例である。

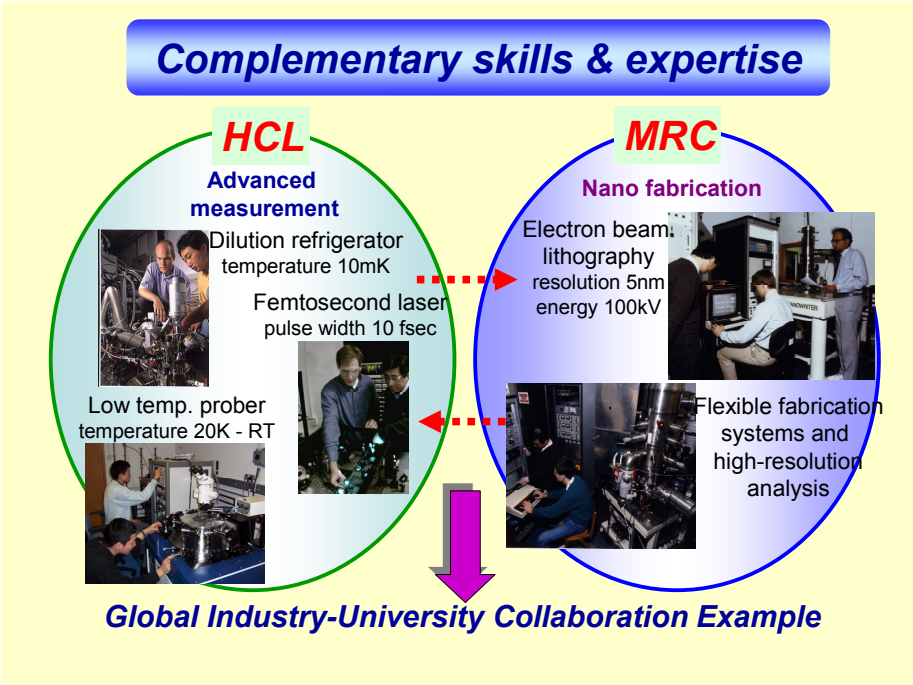

図３　グローバルなオープンで相補的産学連携

したがって、「オープンイノベーション」の上記3タイプについて、その成功を導くための人材育成を考察する必要がある。ただ、上記の中で、タイプ 2 はややビジネス経営的要素が多く、この論文で掘り下げるのは、必ずしも適切ではない。また、タイプ 3 は、すでにこれまで日本企業は体験してきたし、学会でも議論されてきた。しかし、タイプ 1 は、これが、これからの企業の成長にとって極めて重要であるにも関わらず、まだ充分議論されていなし。したがって、以下は、主としてタイプ1について議論する。

ベンチャーによる技術創造

ベンチャーは、常に新技術創造に挑戦している。彼らは、そのような新技術を、世界の誰よりも早く創造し、特許等の権利化で守りを固め、企業価値を増大させる。彼らは、率先してリスクに挑戦する。そして、チャレンジする技術が困難であればあるほど、リスクは大きいが、成功した暁には、その効果が大きく、しかも達成感も大きい。したがって、「オープンイノベーション」では、グローバルなスケールで、ベンチャーの技術を探索し、その中から、真に企業の将来に大きく役立つものを、スピーディーに、誤りなく見つけ出すことが、重要なな仕事になる。

イノベーションにつながるシーズの目利き

したがって、グローバルな企業が「オープンイノベーション」を実現するには、先ず、グローバル・ベンチャーの有する技術の芽の本質を速やかに、かつ正確に見抜く力ー目利き力ーが必要である。この「目利き力」を持つには一体どうすればよいであろうか。また、このような「目利き力」を具備する人材を育成するにはどうしたらよいであろうか。以下、その対応策について述べる。

誰がシーズをもとにイノベーションを起こすか

この答えを用意する前提として、「オープンイノベーション」の本質を考える必要がある。企業の将来を左右する基幹製品は、多岐に亘る技術の集積的なものになるであろう。その中には、勿論、自社のコア技術が、中心にあるはずである。しかし、多岐に亘る技術の中には、自社で開発できないものや、自社に開発部隊がいても、世界のどこかに、より優れた技術が存在するものもある。例えば、無線信号処理の半導体のチップを開発している企業が、これを、音声応用に適用する製品（パッケージ）に仕上げるとき、優れた雑音除去ソフトをこれに組み込めば、商品の価値や競合力は飛躍する。即ち、この場合、チップメーカーは、雑音除去の技術を、これを開発したベンチャーから買う決断をすることが、自社の成長を実現する重要な経営判断である。したがって、このような必要性を正しく見出すこと、そして、これを速やかに経営判断に持っていくことが、イノベーション実現への道である。

シーズとニーズの出会いの場

したがって、シーズとニーズの出会いの場を、真に技術がわかっている技術者レベルと、経営判断できる権限を持っているレベルの両方で、同時並行的に実現することが重要である。また、これらのレベル間で、情報の共有化が行われることも必要である。こうすることにより、技術的な確認と、ビジネス的な判断がスピーディーに行われ、他社優位性を確保できる可能性が高い。

この考え方を下記に示す。

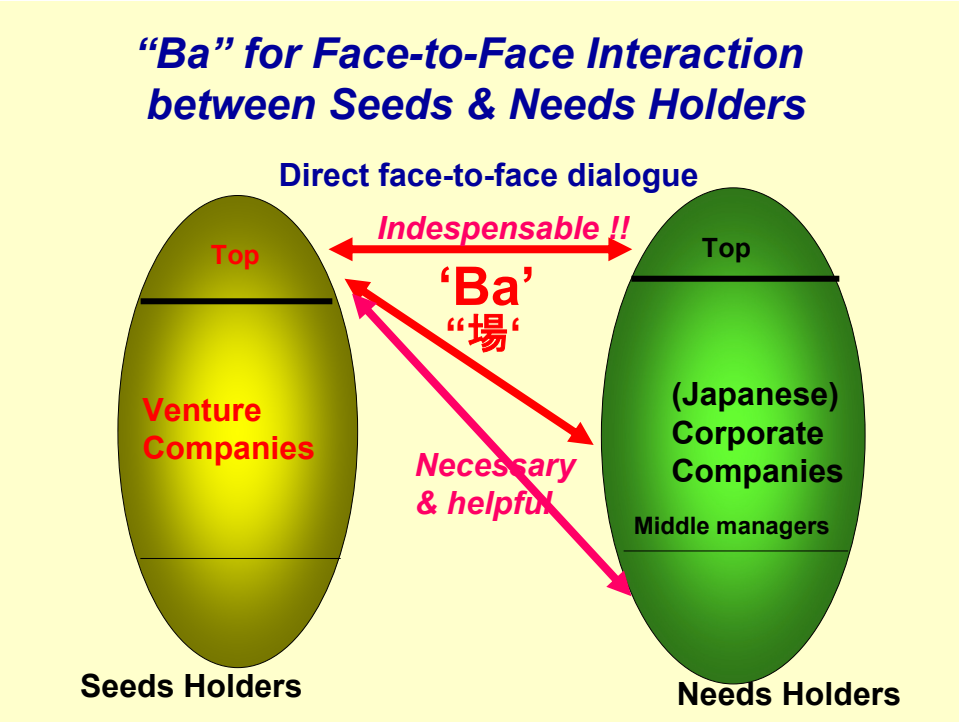

図４　シーズとニーズの出会いの場：トップレベルと技術者レベルの同時対話

オープンイノベーション・エネーブラーの育成

以上を踏まえて、本論分のタイトル「オープンイノベーション加速へのグローバル人材育成」へ立ち返り、「オープンイノベーション」の実現者（エネーブラー）の育成に関して以下特に重要な３点を提案する。

（１）　顧客ニーズを正確に徹底的に把握する（顧客との密なコミュニケーション）

（２）　意思決定者との情報共有（縦横のコミュニケーション）

（３）　グローバルベンチャーとの途切れない対話

結論

「オープンイノベーション」は、グローバル時代における、企業成長の切り札で

ある。したがって、この実現を加速する人材の育成は企業の明日を左右する生命線でもある。世界の英知と連携し、企業のイノベーション力を実質的に大きく増幅する人材の輩出が急務であるが、そのための基本的考え方や、ポイントを整理し提案した。

参考文献

（１） 桑原「**知識ベースのスモールネットワークによるグローバル・イノベーションの加速**」研究技術計画学会 2006 年大会論集

（２）桑原「Providing “Ba” to Connect Global Ventures and Industries」ＵＭＤＳ論集 2006 年